

樹々の若葉の美しいのが殊に嬉しい。一番早く芽を出し始めるのは梅、桜、杏などであるが、常磐木が芽を出すすさまじく何となく心を惹く。

古葉が凋落して、新しい葉がすぐ其後から出るということは何となく侘しいような気がするものである。

椿、珊瑚樹、柚子、ハツ手など皆そうだ。檜、樅は古葉の上に、唯新しい色を着けるばかりだ。

竹は筍の出る頃、其葉の色は際立って醜い。竹が美しい若葉を着けるのは、子が既に若竹になってからである。生殖を営んで居る間の衰えと

いうことをある時つくづく感じたことがあった。

花曇り、それが済んで、花を散らす風が吹く。その後、晩春の雨が降る。この雨は多く、南風を伴って来る。

昨日の花、このために凋落し尽すという恨はあるが、何となく思を収めて感じが深い。硝子窓の外は風雨吹暴れて、山吹の花の徒らに濡れたるなど、歌にでもしたいと思う。

躑躅は晩春の花というよりも初夏の花である。赤いのも白いのも好い。ある寺の裏庭に、大きな白躑躅がある。それがために暗い室が明るく

感じられたのを思い出す。

僕の大きくなった士族町からは昔の城跡が近かった。不明門という処があった。昔、其処に閉じたままの城門があったので、それで名に呼ばれて居るのであるが、其頃は門などはもうなく、石垣の間からトカゲがその体を日に光らせて居た。濠の土手に淡竹の藪があつて、筍が沢山出た。僕等は袋を母親に拵えて貰つて、よく出懸けて行つては、それを取つて来たものだ。其頃は屹度空が深い碧で、沼には蘆の新芽が風に吹かれて、対岸の丘には躑躅が赤く咲いて

居た。

初夏の空の碧！ それに、櫂の若  
芽の黄に近い色が捺すように印せら  
れているさまは実に感じが好い。何  
となく心が浮き立って、思わず詩で  
も低誦したくなる。物が総て光って  
輝いて明るい。

向島の長い土手は、花の頃は塵埃  
と風と雑沓とで行って見ようという  
気にはなれないが、花が散って、若  
葉が深くなつて、茶店の毛布が際立  
って赤く見えるころになると、何だ  
か一日の閑を得て、暢気に歩いて見  
たいような心地がする。

散歩には此頃は好時節である。初  
夏の武蔵野は櫟林、檜の林、その若  
葉が日に光って、下草の中にはボケ  
やシドメが赤い花をちらちら見せて  
居る。林を縁取った畑には、もう丈  
高くなつた麦が浪を打って、処々に  
白い波頭を靡かして居る。麦の畑で  
ない処には、蚕豆、さや豌豆、午葵  
の樹になつたものに、丸い棘のある  
実が生って居るのを、前に歩いて行  
った友に、人知れず採って打付けて  
遣ったり何かすると、友は振返って、  
それと知って、負けぬ気になって、  
暫く互に打付けこをするのも一興で

ある。路はやがて穉樹の林に入って、  
うねうねと曲って行く。と、思いも  
懸けず、林の外れに、おいちにおい  
ちにと呼んで歩く薬売の男が、例の  
金ピカの服を日に光らせながら、さ  
もさも疲れ果てたというように草の  
上に腰をかけて休んで居る。モウパ  
ッサンのノルマンジイを舞台にした  
短篇がそれとはなしに思い出される。  
府中から百草園に行くのも面白い。  
玉川鉄道で二子に行って若鮎を食う  
のも興がある。国府台に行って、利  
根を渡って、東郊をそぞろあるきす  
るのも好い。

端午の節句——要垣の赤い新芽の  
出た細い巷路を行くと、ハタハタと  
五月鯉の風に動く音がする。これを  
聞くと、始めて初夏という感を深く  
感ずる。雨の降頻る中に、さまざま  
の色をした緑を抜いて、金の玉のつ  
いた長い幟竿のさびしく高く立って  
いるのは何となく心を惹く。

新茶のかおり、これも初夏の感じ  
を深くさせるものの一つだ。雨が庭  
の若葉に降濺ぐ日に、一つまみの新  
茶を得て、友と初夏の感じを味った  
こともあった。若い妻と裏にあった  
茶の新芽を摘んで、急こしらえの火

爐を拵えて、長火鉢で、終日かかっ  
て、団子の多い手製の新茶をつくっ  
て飲んだこともあった。田舎の茶畠  
に、笠を被った田舎娘の白い顔や雨  
に濡れた茶の芽を貫目にかけて筵に  
あける男の顔や、火爐に凭りかかっ  
て、終日好い声で歌をうたう茶師の  
さまなどが切々に思い出されて来る。  
母親は其頃茶摘に行つては、よく歸  
りに淡竹の筍を沢山採つて来た。  
楓の若葉は赤いのよりも緑なのが  
好いと私は思う。